

# 結城農業かわら版



第149号

令和4年11月20日

発行元：結城地域農業改良普及センター

TEL：0296-48-0184

FAX：0296-48-2682

## 令和4年産JA常総ひかり秋冬白菜統一目揃え会を開催

10月22日(土)、ビ・アーンジュYUKIYAにてJA常総ひかり秋冬白菜統一目揃え会が開催されました。

部会長からは「社会情勢は厳しい状況が続くが、産地の維持発展には、再生産価格を上回る市場価格となることが重要。」とあいさつがありました。

市場からは「生産者の高齢化により、全国の主産地では作付減少が進む中、JA常総ひかりは数量を維持している。日本一の産地として有利販売に繋げていきたい。」と意見がありました。

統一目揃えでは、出荷規格や品質について、出荷品の現物をもとに確認を行いました。また、肥料価格高騰対策及び再生産価格について情報提供がありました。

普及センターから、フェロモントラップ調査に基づく害虫発生状況について説明しました。

今後も露地野菜の高品質・安定生産のため、引き続き産地を支援していきます。



## アロマキャンドル作り教室を開催しました

10月26日(水)、結城地域女性農業士会は、食農教育活動の一環として「アロマキャンドル作り教室」を開催し、12名が参加しました。八千代町在住のキャンドル作家である高木美奈子先生を講師に招きました。

教室では、アロマキャンドルの香りと光を楽しむキャンドルホルダーを作成しました。キャンドルホルダーは大小2種類のガラスで2種構造をつくり、ガラスの間にドライフラワーを飾り付け、樹脂で固めたものです。参加者は思い思いのデザインでキャンドルホルダーを作成しました。

参加者からは「花材の選択や配置によってデザインの仕上がりが変わってくるので、自身の経営にも意識してデザインを取り入れたい。」という声が聞かれました。

普及センターでは今後も、女性農業者活動の活性化のため支援を行っていきます。



## 農業学園広域講座「マーケティング講座」を開催しました

10月28日(金)、結城普及センターにて農業学園を開催し、県西地域の学園生13名が参加しました。次の2部構成により当普及センター職員が講師を務めました。

第1部「流通の仕組みと小売店の販売戦略」では、東京都中央卸売市場大田市場における青果物取扱状況や、卸、仲卸の役割等について紹介しました。また、量販店の販売戦略として、他社と競合するための企業努力や、カット野菜の需要増加に対応した商品構成など、直近の消費者動向も踏まえて紹介しました。

第2部「6次産業化を進めるためには」では、農産加工を取り上げました。周年的な所得を得られるメリットとともに、商品の企画、開発、完成に多くの時間や費用を要するため、入念な計画策定の重要性を説明しました。

受講生からは「規格外品の有効活用を模索していた。ぜひ農産加工にチャレンジしたい。」と前向きな意見があり、有意義な講座となりました。



## 土壌・肥料のはなし ～土壌の分類～

茨城県内の土壌の種類は、畑作地帯では黒ボク土が主体になっています。黒ボク土は、黒ボク土、多湿黒ボク土、黒ボクグライ土に分けられます。

黒ボク土は火山の噴火がもたらした火山灰からできています。この名前は、黒くてホクホク（またはボクボク）していることに由来していると言われています。多湿黒ボク土と黒ボクグライ土は、地下水が多い土地に分布し、水田に多い土壌です。

黒ボク土は腐植が多く物理性は良いですが、アルミニウムを多く含むため、リン酸と結合して不溶化し、リン酸が作物に吸収されにくくなります。養分の保持量は大きいですが、酸性になると保持力が低下します。このため、従来黒ボク土では石灰とリン酸資材、堆肥などの有機物施用が有効とされています。土壌の化学性改良にあたっては、土壌診断結果に基づいた土壌改良と施肥管理を行いましょう。

普及センターでは毎月2回土壌診断を行っていますので、ぜひご活用ください。  
※1回の診断は土壌サンプル50件を上限に、超過分は次回診断となります。

## やさいメモ ～ハクサイ～

ハクサイは中国北部原産で、日本で本格的に栽培が始まったのは20世紀初頭といわれています。

ハクサイにはカリウムが多く含まれており、余分なナトリウム（食塩）を体外に排出するのを手助けするため、高血圧の予防に繋がります。また、骨の健康に欠かせないカルシウム、ビタミンKも多く含まれています。さらに、100gあたり13～14kcalと低カロリーなのでダイエットにもおすすめです。



## 編集後記

今年4月に入庁し早7か月が経ちました。慣れない仕事の連続であっという間でしたが学ぶことが多く、特に農家研修の際、天候に大きな被害を受けた農家を目の当たりにしたときはショックを受けたとともに、対策技術の普及が必要だと感じました。

これからも様々な業務を通じて地域の農業の発展に貢献できるよう、頑張ります！（山本）